新刊を読む

先見性に、心からの敬意

菅谷昭 Akira Sugenoya | 医学博士・長野県松本市長

『「内部被ばく」こうすれば防げる！
放射能を21年間測り続けた女性市議からのアドバイス』
漢人明子著・菅谷昭監修（発売中）

「もし放射線を浴びたら、体にどのような影響があるのでしょうか」

「私たちのまちの行政機関では、教育委員会も含め学校給食に関し、『大丈夫だから』と言って、放射能測定などに応じてくれず困っています。あなたの方から声をかけてもらえませんか」

「家には小さな子どもがいるのですが、どのような食べ物を与えたらよいのでしょうか」

「日常生活における内部被ばくの防護策について教えてください」

「国の言っている安全尺度を、本当に信じてよいのでしょうか」

東京電力福島第一原子力発電所の事故発生以来、私のところ（松本市役所）には、このような質問が数多く寄せられており、正直のところ困惑している。私には本来の市民に対する行政サービスをはじめとする公務などが山積しているからである。

それにしても、何故（なにゆえ）にこれほどまで多くの質問が私宛に届くのかについては、主に次の二つの理由からと考えている。

一つは、私がかつてベラルーシ共和国において、チェルノブイリ原発事故後の医療支援活動に関わっていたからであろう。小児の甲状腺ガンの外科治療への関与、汚染地域の当時の様子、更には現在の汚染地の状況等々、日本においても世界においても、このような経験や現地からの情報を持っている人間が他にいないからだと思う。

もう一つは、多くの国民が政府や東電等が繰り出す原子力災害への後手、後手の対応や、不信を招きかねない言動に憤り、もはや国をあまり信用しなくなっていることが挙げられる。

私自身も公務に支障のない範囲で、全職員や市民の理解と協力を得ながら、国民の不安の解消に応えるべく努めているところである。

そんな折、この度出版された漢人明子氏の〝「内部被ばく」こうすれば防げる！　放射能を21年間測り続けた女性市議からのアドバイス〟の監修を依頼されたのである。

私の専門領域である医学書の監修ならばそれほど問題とならないと思うのであるが、今回のような場合には、実のところ大変悩んだ末にお受けした次第である。

本書を通覧するにあたり、一番はじめに私が最も驚いたことは、著者の漢人氏が、一九八六年四月二六日に発生したチェルノブイリ原発事故に端を発し、放射能汚染に不安を抱く有志を募り、精力的に市民運動を展開し、行政機関による食品の放射能測定の要望を粘り強く求め続けた結果、二年後には行政を動かし、測定器の購入にこぎつけ、更に市民組織を軸に、それ以降今日まで21年間にわたり放射能測定を行い、食品汚染の監視を継続していることである。

そのような中、今回のわが国におけるレベル7に相当する原発事故の発生である。著者らの一連の行動や先見性に、改めて心から敬意を表するものである。

この本は、放射能から身を守る3つの原則、即ち「測る」、「避ける」、「動く」の章立てにより構成されている。お読みいただければわかると思うが、全体を通して大変理解しやすい。難解な言いまわしや専門用語を極力用いず、まさに一般の方々を対象とした書物と言える。

「わかりやすさ」の理由は、多くの市民の皆様からの質問や相談内容を基にして、具体的な形で丁寧に説明し、必要に応じて関連資料も添えているからである。

〝目に見えない〟、〝においもしない〟、〝味もしない〟、このような様々な種類の放射性物質に対する異常なまでの恐怖や、更には不気味な強迫観念にさいなまれる市井に生きる人々に対し、確たる説得力をもって述べられている。

単なる机上での理想論や研究成果を語るのではなく、具体的事例、何よりも著者らの活動の結果を掲載していることに本書の強味がある。冒頭に掲げた私への質問などに対する的確な解答が散見され、読者も納得できるものと思う。

改めてこの書に目を通しながら、かつてのベラルーシでの医療支援活動を思い返す時、甲状腺ガンの手術を受けた幼き子どもたちの親の悲しみ、切なさが私の胸中を駆け巡っている。

「あのとき、外で遊ばせなければ…」

「あのとき、キノコを食べさせなければ…」

「あのとき、イチゴを採りに森へ連れていかなければ…」

福島にこのような悲しみの連鎖が生じないことを、ただひたすら祈り、願うのみである。

本の話
「文藝春秋」二〇一二年三月号より